

岩手日報企画 「再興への道」—いわて東日本大震災 検証と提言

震災遺構に見る伝承②

大川小の保存 思い出と教訓を刻む2016年5月30日



宮城県石巻市の大川小は東日本大震災の津波で、児童74人と教職員10人が死亡・行方不明になった。適切な避難行動が取られず、学校管理下で起きた最大の被害。「あの日、何が起きていたのか伝えたい」。震災遺構として被災校舎の保存が示された今、遺族は自らに言い聞かせる。

津波襲来までの約50分。防災無線や広報車が避難を呼び掛けた。「山に逃げよう」。児童は危険を感じていたが、教職員は校庭にとどまり、子どもを守る選択ができなかった。当時6年の次女真衣さんを亡くした鈴木典行さん(51)は「上流の保育所だって避難したのに」と漏らす。

色あせた黒板や崩れかけた卒業制作の壁画。校舎を目にするたび、悔やむ思いは尽きないが、保存を受け止め、今は有志と語り部の活動に力を入れる。「教訓を学び取る場として、伝承する手段も考えていかなくてはならない」

被災校舎の保存は地元の意向も大きかった。解体を望む遺族や住民もいたが、大川地区復興協議会は住民懇談会を経て昨年5月、市に要望書を提出。学校の責任を指摘し、訴訟も行われている中だったが、市は今年3月に保存の方針を表明した。



水圧で押し上げられた天井、支柱が倒壊した渡り廊下。震災当時、北上川をさかのぼった津波が校庭に

押し寄せ、渦を巻いた。威力はもとより、被害を防げ得なかつた教訓をかみしめる場として、校舎は大きな意味を持つ。市は6月にも住民や遺族を含めた協議の場を立ち上げ、環境整備の検討に着手する。

保存整備に進む中、当時3年の長女未捺さんが犠牲となった只野英昭さん(45)は語り部をしながら、訴訟の原告にも名を連ねる。「50分間の判断や行政の責任逃れの姿勢も伝えていかなくては、同じことが繰り返される」と指摘。「手を合わせてくれる人たちに、同じ思いをしてほしくないだけです」

対岸の地区には津波を伝える石碑があつたが、大川地区の防災意識は希薄だったとも言う。「結果的に『見たくない』『忘れない』という思いがあつたかもしれない。つらくても語り継ぐことが、命を守ることになる」と確信する。

震災から5年2ヶ月余り。大川地区は更地が広がり、残された校舎は遺族にとって、子どもとの思い出を確認する場所にもなっている。「三女が今年、真衣と同じ6年になった。電話口の声もそっくりなんです」。鈴木さんは時間の経過を実感する。失われた命に報いるため、痛みを受け止め、校舎と向き合う。

大川小の被災校舎 北上川河口から約5キロ上流の低地部に立地。校舎からは河川堤防で川は見えないが、避難可能な裏山は校庭に隣接していた。ハザードマップでは津波浸水の想定区域外で住民の多くも犠牲になった。校舎は全体が保存され、周辺は慰霊・追悼の場として環境整備が行われる。現時点の環境整備費用は約5700万円、年間の維持管理費は約500万円を見込む。石巻市内の震災遺構は、中心部の門脇小校舎も一部保存の方針が示された。津波と火災の被害を受け、校内の避難者が高台に逃れた経験を有する。

【写真=震災遺構として保存される大川小の被災校舎。避難行動が取られなかつたあの日の選択を問い合わせる=宮城県石巻市】



岩手のニュース